

近所や近隣との「ゆるやかな交流」の意味とは

— 「外でちょっと立ち話」から考える —

(公財)ダイヤ高齢社会研究財団 主任研究員 工学博士

澤岡 詩野



身体的な自立度が低下傾向にある高齢期は、加齢に伴い外出行動半径が狭まり、交流も減少していくことが知られている。加齢により孤立化しないためにも重要になってくるのが徒歩圏や自転車圏、「近所」や「近隣」といった場で交流する相手の存在といえる。しかし、高齢者の多くがそれらの相手との関係をもっているかといえれば必ずしもそうとはいえない。既存研究においても、高齢女性は多くの近隣関係を有する一方で、男性は配偶者や職場など一部の人としか関係を保持していないことが確認されている。

加えて、交流が希薄化しつつある都市部や都市郊外においては、「近所」や「近隣」といった場で交流する相手とは「挨拶くらいでよい」と答える高齢者が多くを占めることも明らかにされている。地域での孤立防止などを考えるうえでも、近所や近隣に「挨拶」になんらかの「+α」を付加した『ゆるやかな交流』を増やしていくことが重要なポイントとなっているといえる。

本稿では、手助けなど手段的サポートや相談などの情緒的なサポートといった親密さを前提にした付き合い方ではなく、会えば挨拶の次に生まれるであろう「+α」として「外でちょっと立ち話をする」くらいの交流に着目する。具体的には、最初に高齢者にとっての「近所」や「近隣」の意味を既存研究から整理する¹⁾。次に、実際の近所や近隣との付き合い方について、内閣府の「高齢者の日常生活・地域社会への参加に関する調査」²⁾をもとに概観していく。

1. 高齢者にとって「近所」や「近隣」とは？

潜在的なサポート源である家族を身近にもたず、ひと

り暮らしや子どもと同居しない高齢者が増加傾向にある日本社会において、特に住人同士の支え合いの希薄な都市部では、安心して暮らし続けられる地域社会を構築することが課題となっている。このなかで、地域におけるつながりや信頼としてのソーシャルキャピタル、近所や近隣、住民同士の助け合い活動、町内会・自治会活動といった地域におけるインフォーマルな関係性の果たす役割が問い直されている。

日本の高齢者を対象にした研究では、近所や近隣は負担の重い手段的サポートを期待することはできなくても、その地理的近接性ゆえに緊急時の手助けやちょっとした用事といった負担の軽い手段的サポートを期待できる存在であることが共通の知見として明らかにされている。このなかで、家族資源の利用可能性と友人・近隣ネットワークの関連に着目した研究では、無配偶者や子どもが遠くに住む人ほど、友人・近所や近隣が情緒的、手段的サポート源になっていることを指摘している。

近年では、これらの近隣、地元での友人や知人といったネットワーク、地域コミュニティでのつながりを得ることでもたらされる所属感や情緒的つながりの共有といった「コミュニティ感覚」に着目した研究が行われている。このなかで、「地域社会への態度」に着目した研究では、社会参加・奉仕活動（町内会・自治会、ボランティア活動、老人会など）がそれらの地域の意識の指標との間に正の関連があったことを明らかにしている。

しかし、これらの研究で測定された近所や近隣といった場で交流する相手は、「やりとりのある近隣の人」や「近所に住んでいることがきっかけで知り合った友人」といった、どちらかというとな隣ネットワークの強いつ

なかりに偏った他者を捉えている可能性が否めない。実際に高齢者が日常的に交流する他者には、近所や近隣の人などが多くを占め、交わされる会話の内容もサポートに関することは僅かで、「挨拶」や「世間話」「うわさ話」などの軽いあるいは習慣的なもの、「ゆるやかな交流」の多いことが明らかにされている。

2. 男女別にみた「近所」や「近隣」との交流実態

ここからは、先に記したように2021年に内閣府が日本の一般高齢者を対象に行った「高齢者の日常生活・地域社会への参加に関する調査」から、「近所」や「近隣」との交流実態を概観していく。この調査は内閣府が施策立案のために高齢者の日常や社会活動の実態や意識を高齢当事者自身にアンケートを行ったものである（全国60歳以上の男女併せて4,000サンプル、有効回収率60.9%）。筆者は、企画分析委員として参画し、報告書の第3章「調査結果の分析・解説」で「ふだんの近所の人との付き合い方」について分析を行った。

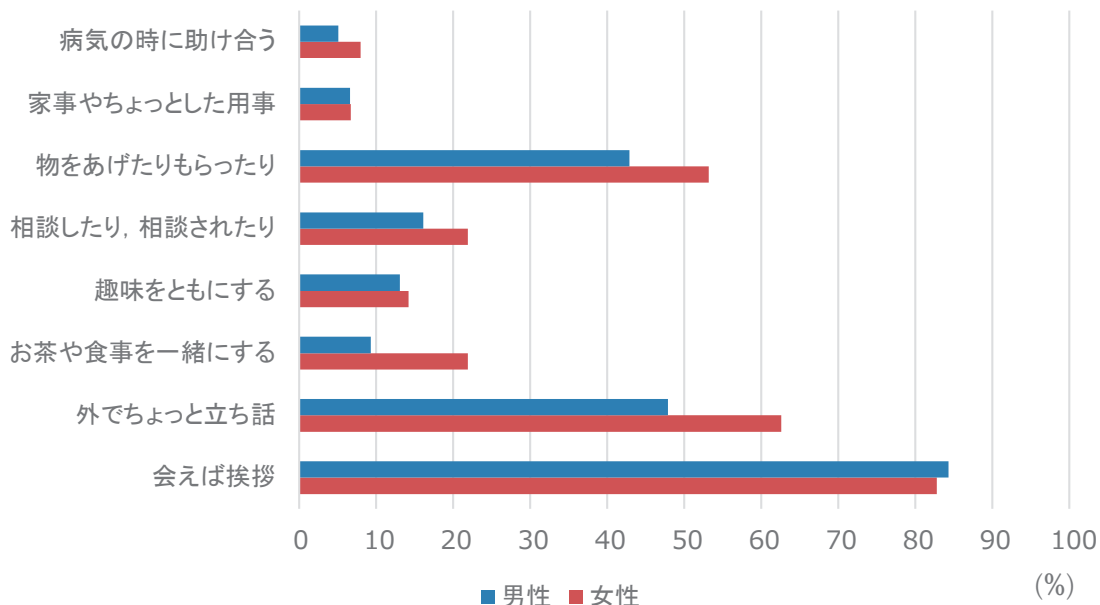
最初に、サポートの授受から挨拶までの近所との付き合い方に関する8項目について尋ねた結果を、男女別に概観していく（図1）。強いつながりであるサポートの

授受については、負担の大きさから家族や専門サービスが選択されることの多い「病気の時に助け合う（男性5.1%、女性8.0%）」や「家事やちょっとした用事をしたり、してもらったりする（男性6.6%、6.7%）」といった付き合い方を近所としている人は男女ともに僅かであった。しかし、距離的近接性に裏打ちされた気安さからか、「物をあげたりもらったりする」については後述する「外でちょっと立ち話をする」と同程度にやり取りが行われていた。男性（42.9%）よりも女性（53.2%）でやり取りしている人が多く、これらは既存研究や調査と同様の結果といえる。

次に、楽しみを伴う活動や会話の共有であるコンパニオンシップに関する「お茶や食事を一緒にする」と「趣味をともにする」については、行動によって異なる傾向が認められた。お喋りが目的となることの多い「お茶や食事を一緒にする（男性9.3%、女性21.9%）」については男性よりも女性で多く選択されていたが、興味関心を共有する「趣味をともにする（男性13.1%、女性14.2%）」は男女で有意な差が認められなかった。

ゆるやかな交流である「外でちょっと立ち話をする」は、近所との付き合い方8項目中で2番目に多く選択さ

図1 男女別にみた近所との付き合い



れ、男性（47.9%）よりも女性（62.6%）が多かった。最も多く選択されていたのは「会えば挨拶する」で、この割合に男女で有意な差は認められなかった（男性84.3%、女性82.8%）。この結果を異なる視点で眺めると、「会えば挨拶をする」くらいの関係性すら近所にもたない、地域社会から完全に埋没している高齢者が、男女に関係なく15%以上も存在しているとも言い換えられる。

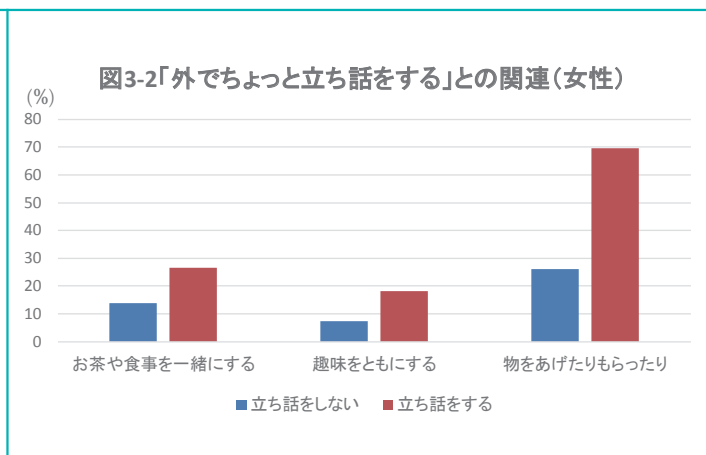
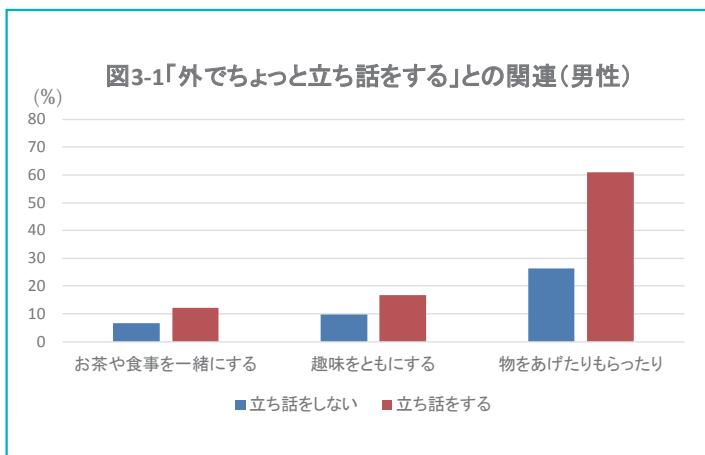
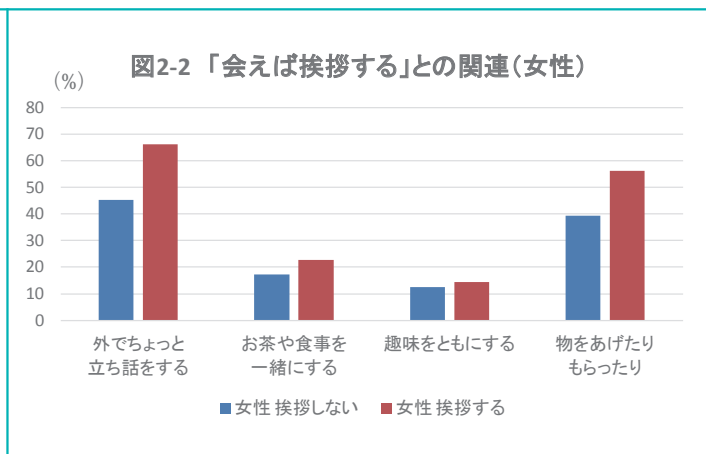
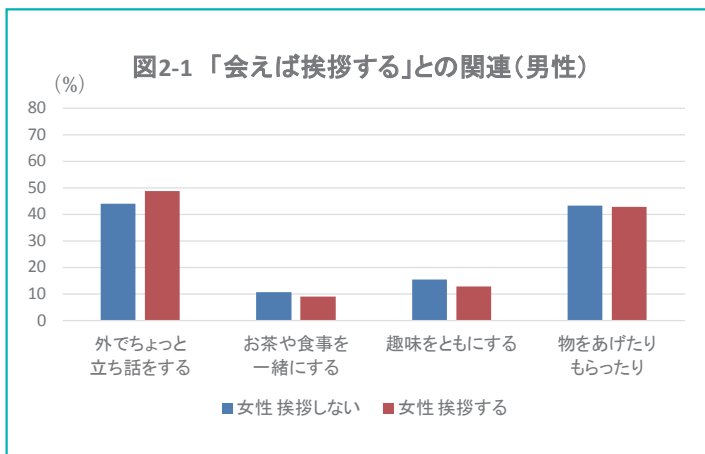
3. 「ゆるやかな交流」との関連

ここからはゆるやかな交流に位置付けられる「会えば挨拶する」「外でちょっと立ち話をする」に着目していく。まず、最もゆるやかな交流「会えば挨拶する」と他の交流（「外でちょっと立ち話をする」「お茶や食事を一緒にする」「趣味をともにする」「物をあげたりもらったりする」）との関連を男女にわけて概観していく（図2-1、図2-2）。女性では「外でちょっと立ち話をする」と回答した人の割合が「会えば挨拶する」人多

かった。男性では有意な差は認められなかった。

「お茶や食事を一緒にする」「趣味をともにする」と回答した人の割合についても「会えば挨拶する」人多いことが予測されたが、男女ともに有意な差は認められなかった。さらに「物をあげたりもらったりする」と回答した人の割合については「外でちょっと立ち話をする」と同様の傾向が認められた。女性では「物をあげたりもらったりする」と回答した人の割合は「会えば挨拶する」人多かった。しかし、男性では有意な差は認められなかった。

次に「外でちょっと立ち話をする」と他の交流（「お茶や食事を一緒にする」「趣味をともにする」「物をあげたりもらったりする」）との関連をみていく（図3-1、3-2）。いずれの項目についても有意な差が認められ、近所とそれらのお付き合いをしていると回答した人の割合は、「外でちょっと立ち話をする」人多かった。この傾向は男女に共通して認められた。



4. 「ゆるやかな交流」の意味すること

ここまでは近所や近隣で交わされる挨拶や立ち話の実態について検討を行ってきた。果たして、これらのゆるやかな交流にはどんな意味があるのだろうか、孤立や孤独を抑止する効果があるのだろうか？ここからはゆるやかな交流と孤独感（「自分は取り残されていると感ずることがある」「自分は他の人たちから孤立していると感じることがある」）との関連を検討していく。

回答者には孤独を感じる人が多くを占めるなかで、「決して感じない」人も一定割合存在した。「自分は取り残されていると感ずることがある」については、男性で21.0%、女性で25.0%が「決して感じない」と回答していた。「自分は他の人たちから孤立していると感じることがある」についても、「決して感じない」と回答したのは女性が男性を上回っていた（男性 21.7%、女性 27.1%）。

これら孤独感を尋ねた2項目と「外でちょっと立ち話をする」との関連を分析した（図4-1～図5-2）。この

結果、男女ともに有意な差が認められ、「外でちょっと立ち話をする」と回答した人の方が総じて孤独感も低かった。

現在の地域社会では、一足飛びに支え合いや助け合う関係性を求めがちである。現実的にそれは可能なものであろうか？本稿の分析結果から、そのような関係性のタネマキとして「外でちょっと立ち話をする」くらいの交流を増やしていくことの重要性が示された。加えて、立ち話くらいの交流でも孤独感を軽減する可能性が示唆された。地域包括ケアシステムの構築を目指す動きのなかで、『ゆるやかな交流』のもつ意味を改めて地域づくりに関わるプレイヤーで考えることが肝要である。

【参考文献】

- 1) 澤岡詩野, 渡邊大輔, 中島民恵子, 大上真一 (2015) 「都市高齢者の近隣との関わり方と支え合いへの意識」, 『老年社会科学』 37(3), pp.306-315.
- 2) 内閣府: 「令和3年度高齢者の日常生活・地域社会への参加に関する調査結果」.
https://www8.cao.go.jp/kourei/ishiki/r03/zentai/pdf_index.html (Accessed 2023/1/4).

